

# HAWAII '06-'07 NORTH SHORE

僅か7マイルの海岸線に世界有数の名ポイントが数多く点在する  
ハワイ、オアフ島のノースショア。  
その代表的なポイント5ヶ所に焦点を合わせ、  
そこで繰り広げられた熱いセッションの様子をお届けしたい。

文/吉田憲右

# ノースショア 極所!

キメポイント



# Monster Energy Pro

4 STAR "WQS" EVENT / Banzai Pipeline Oahu-hawaii



JANUARY 27TH - FEBRUARY 9TH 2007

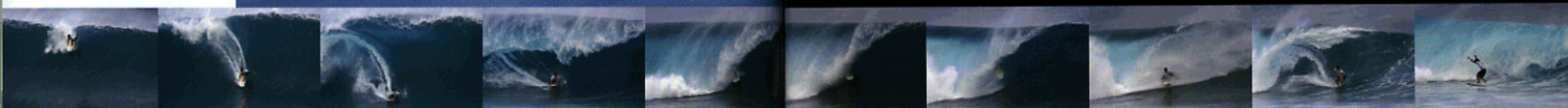
プロフェッショナルとして自分の名前を世界にアピールできる大舞台がパイプラインだ。世界のパイプラインで大いに目立って自分のステータスをあげる。それはプロサーファーなら誰でも思い描くサーファーストリームの一つだ。今回のモンスターエナジープロには14名のジャパニーズプロが登場。それぞれのドリームを追いかけることとなった。

撮影/神尾光輝 近藤公朗

文&キャプション/大森修一



パイプラインで乗ってみたい波のひとつだ。狙っていた。いつものセッションではローカルに乗っている波だった。リアルなパイプラインになる波だった。だからその波が世界に入ったときには同時にマインドが入り替わり身体が反応していた。パドリング、パドリング。波が接近してくる。いい波だった。ピークに身体を持ち上げられながら柔らかな中腰の姿勢でレールを掴んでテイクオフ。波のボトムがクイックと駆け上がりながら水が集まりはじめる。パレルのラインを見定めながらフルインするタイミングを計る真平。そしてもう遅いんじゃないかと思えるタイミングでスローモーションのように波をドロップ。追い込まれるようにパレルのカーテンの中へ消えていった。パレルの中は思った通りのパイプラインだった。波のボトムとトップがボウーンとエアの筒になってその中でサーファーはキューと横に平行移動していく。ビーチの砂を前に浴びせられたようにパレルの中のスピッツが鼻にチクチク刺さります。身体の後ろから風圧でもって身体をグアーと押される。へその下がむずむずする感じになる。チューブライディングで最も気持ち良くなる瞬間を真平はキャッチしていた。しっかりと前を向いて身体の重心を下げてボードを走らせスピードをキープして踏ん張る。そして自分の顔上からカーテンを開けるようにパレルが口を開き急速に視界が開けていった。そして真平は両手を突き上げながら波の外へと飛び出していた。Shingo Horiguchi.



## ハイレベルの次元でサーフィンを見せ合う

パイプラインの試合は想像を絶する波の大きさに恐怖と快感をもたらすチューブライディングが売り物だ。テイクオフすら怖気づ

くようなパイプラインパレル。ヒート時間の20分間に確実に2本乗って、2本ともチューブでイン&アウトしなければならない。チャレンジスピリッツが試されるだけでもヘビーだが、まずはパイプラインというコンディションを克服することができているかどうかに関

われるということになる。スキルがあるかどうかということだ。パドリングする自分の目と鼻の先で轟音とともに砕け散るソリッド8ftの恐怖を超越してゴーフォーイット魂を発揮できるかどうか。さらにチューブライディングというサーフィンで最もハードなパフォー

マンスをメイクするアビリティが備わっているかどうか。パイプラインで試合に出場するということは、まずはハイレベルの次元でサーフィンを見せ合うことが出来るかどうか求められるということだ。プロ中のプロが出場するということが。中途半端はまったく

通じないのがパイプライン。それぐらいの覚悟と技がなければ出場すると恥をかくことになってしまうのが関の山だ。

バンザイパイプラインで最初に小林正明と松井保徳がジャパニーズサーファーとしてパイプラインマスターズに初出場したの

が1978年。以来約30年間にわたりジャパニーズのチャレンジの歴史は久我幸男や関野朝らに引き継がれ、さらに藤田貴之と小川直久らへと3世代のサーファーによって引き継がれてきた。そして、今回のモンスターエナジーでは14名のプロフェッショナルが登場。